

# インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

四 二つの攻勢 後編

インヨウ・カオス  
(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

四 二つの攻勢 後編

☆

私は突然、空に現れた大きな物体を指差して言った。  
「……？ 空がどうかしましたか？」  
空を見上げながらアオイさんは言つた。  
「ほら、あそこに浮かぶアレ！」  
「雲以外に、特に何も浮かんではいませんが……」  
困惑したようにアオイさんは言つた。  
「あ、あれ？ アオイさんには見えていないの？  
あんなに大きいのに……」

「湖君？ どうした？」

足を止めた私とアオイさんを訝しんで、夏美さんは訊ねてきた。

「あ、あれ……」

私は空に浮かぶ謎の物体を指差した。

ソレはとても大きな物体で、ウヨウヨと形を不安定に変えながら空に浮かんでいた。

赤とオレンジの中間のような色のソレは、何かとてつもない力を秘めているように感じた。  
「ん？」

夏美さんは私の指差す方向を見上げた。

すると、驚いたように目を見開いて、私を見た。

「湖君、あれが見えるのか？」

夏美さんは空に浮かぶ大きな物体を指差して問い合わせた。

「は、はい」

「あと少しだ」  
振り向いて夏美さんは言つた。

「はい」

私は頷いた。

これから向かう場所はどんな所だろう。  
夏美さんのご両親が仕事で使っていたと言つてい  
たけど……。  
そんな事を考えながら、私はふと何気なく空を見  
た。

すると

「……わっ！ 何あれ！」

空に、「何か」が浮かんでいた。  
「どうしたのですか？ たまさん」  
横にいるアオイさんが私に訊ねた。

「い、いやアレ……」

私は頷いた。

「いつから覗えているんだ?」

「い、いつからって……今、気づきました。何とな

く空を見たらアレが浮かんでいて……」

「今までにアレを覗た事は?」

「な、ないです……」

私の答えを聞いた夏美さんは、考えるようにぶつぶつと呟き始めた。

「今……見えるように? どうして……まさか、俺と行動しているからそれで……血が繋がっているからか? ……やっぱり親父が言っていた事は……」

「あ、あの夏美さん? アレは何なのですか?」

私が質問すると、ハツとしたように顔を上げて夏

美さんは答えた。

「あ、ああ。アレは何というか……この町のエネルギー……といったところかな」

「エネルギー……ですか?」

「いや、エネルギーというよりは、『この町そのもの』と言つてもいい存在……悪い、説明するのは少し難しい」

「は、はあ……」

「……いろいろと気になるが、今は後回しにした方がいいか……」

「そう呟くと、夏美さんは私とアオイさんに続けて言つた。

「とにかく、今は急ごう  
「は、はい」  
私たちは再び歩き出した。



「どこに行つたんだ、アキホさん……!」

僕は住宅街を駆け回っていた。

アオイさんが近くにいる、と言つてアキホさんは飛び出した。

だから、そんなに遠くへは行つていなければれど……。  
「早く見つけて戻つた方がいいよな……」

昨日、僕を襲つてきた霊がまだ近くにいてもし、今の状態で襲われたら確実に、「喰われて」しまふ。

アキホさんもアソツに遭遇したら、どうなるか分からぬ。

「そもそも、本当にアオイさんがこの近くに……?」

だけど、あんな様子のアキホさんは初めて見た。  
何か、確信のようなものを感じていたようだっただけれど……。

「……今はアキホさんを探すのが優先だ」  
雑念に囚われないように走る速度を上げて、朝の

住宅街を僕は駆け抜けた。



「着いた」

住宅街の中にひつそりと佇む一軒家の前で、夏美さんは立ち止まつた。

「ここですか？」

「ああ」

領いて、夏美さんは玄関のドアへと近づいていった。

どう見ても、二階建ての普通の一軒家に見える……。ここが夏美さんの両親の、「仕事場」だった所なのだろうか。ズボンのポケットから鍵を取り出すと、夏美さんは玄関のドアを開けた。

「入つて」

「お、お邪魔しまーす……」

「お邪魔いたします」

玄関に入つて右手側に二階へと続く階段があつて、真ん中は廊下、左手側は台所とそれに続くようにしてリビングがあつた。

「こっちだ」

夏美さんは真ん中の廊下を進んでいった。

「……やっぱり普通の家にしか見えない」

家中を見渡しながら私は呟いた。

気のせいか、微かに線香の匂いがする。

この雰囲気は、昔よく行つていたおばあちゃんのお家に似ているなあ……。

「何だか懐かしい感じがします……」

そう呟いたアオイさんも、私と同じ雰囲気をこの家から感じているのだろうか。

「この部屋だ」

廊下の先を右に曲がると、襖で仕切られた部屋があつた。

すうっと襖を横に引いて、夏美さんは部屋の中へと消えていった。

私とアオイさんもその後へと続く。

中は畳張りの部屋で、広かつた。

ふと、中学生の時に修学旅行で行つた旅館の事を思い出した。五、六人ぐらいが寝泊まりできそうな広さだ。

「二人とも部屋の真ん中に座つてくれ」

「わ、分かりました」

言われた通りに部屋の中央へと向かう。

「ん？」

丁度、部屋の真ん中の畳に何かの図形が描かれていた。

掌程の大きさのその図形は、円の形をしていて、その中に漢字なのか外国語なのかよく分からぬ文

字が書かれていた。

「湖君は円の右側に、アオイさんは円の左側に座つてくれ」

肩に掛けた鞄の中から何かを取り出しながら、夏美さんは言つた。

「分かりました」

「はい」

私は円の右側に座つた。

今の状況からか、この家の雰囲気のせいなのかは分からぬけど、自然と私は正座していた。

横を見ると、円を間に挟んで隣にいるアオイさんも正座していた。

正座をしているアオイさんの姿は、着物や部屋の畳と相まって、とても絵になるなあ……と場違いなことをつい考えてしまった。

「今から行う事を説明したいと思う」

私たちの目の前に来て夏美さんは言つた。

「これから俺は、『ヤツ』を誘き出す」

「お、誘き出すってここに……ですか？」

「ああ。正確に言えばこの家の周辺に、だが」

夏美さんは続けて言つた。

「昨日、対峙した時にヤツは酷く、『飢えて』いるように見えた」

「飢えて？」

「そうだ。おそらく、何らかの理由で今、ヤツは力

が弱まっているんだろう。力を取り戻すには、エネルギーを吸収しなければならない。そこを利用してアイツを誘き寄せる」

夏美さんは、細長い棒のようなものを、図形の上に置いた。

よく見ると、それは木の枝のようだつた。

「エネルギーを得る方法はいろいろとあるだろうが、『人間を食べる』というのも一つの手段だ。実際にアイツの中には何人かの人の魂が感じられた」

「ひ、人を食べる……」

夏美さんの説明を聞いていると、だんだんと血の気が引いてきた……。

「これからやるのは、まあ……この家を中心に関味しそうな匂いを町の中に発して、飢えたアイツを誘き寄せる……といった感じかな」

首を傾げて考えるようにして、夏美さんは言った。

「そ、それって大丈夫なんですか？」

「君たちは大丈夫だ。そこに座っている間はね。この家が建っている土地は、俺たちの一族と相性がいいんだ。特にこの部屋の中は」

「は、はあ」

「その畳に描かれている円には、特別な術がかけられている。そこに座っている間は絶対に君たちは安全だ」

断言して夏美さんは言つた。

「……しかし、それは言い換えれば、『その円から離れると安全は保障できない』って事だ。だから、絶対にその場から動かないでくれ」

「わ、分かりました」

怖そうな靈に食べられたくない私は、激しく縋りに首を振った。

「……よし、それじゃあ始めようか」

夏美さんがそう言つた瞬間、部屋の中の空気が一気に張り詰めた。

「……」

夏美さんはその場に腰を下ろして正座をすると、目を瞑りながらぶつぶつと呪文のようなものを唱え始めた。

すると。

「わっ……！」

円に描かれた図形が紫色に光つた。

「……やつぱりまだこの町にいるな」

そう呴いて、夏美さんはまた呪文を唱えた。

「とても不思議ですね……」

アオイさんは光る図形を見ながら呴いた。

「そ、そうですね」

小声で私も頷いた。

その時。

「どういう事だ……！」

突然、夏美さんが怒鳴るように言つた。

「ご、ごめんなさい！」

勝手にアオイさんと話をしたので怒られたと思つた私は、つい謝つた。

だけど、夏美さんが怒鳴つたのは別の理由からだと直ぐに分かった。

「アイツの気配が二つ……？　どういう事だ？　ヤツには仲間……いや、協力者か……？」

目を瞑つて何かを感じ取つている様子の夏美さんは、額から汗を流した。

「どっちが本物だ……。いや、迷つている暇は……とにかく、近くにいるヤツを最初に……」

夏美さんは目を開いた。

その時。

ガチャリ……と、玄関のドアが開く音が、襖越しに聞こえた。

「な、夏美さん……」

恐怖感が全身に走るのを感じながら、私は夏美さんを見た。

「いや、『ヤツ』ではない……しかし」

夏美さんは立ち上がりと、襖に近づいた。

すると。

「アオイ！　いるんでしょう！　アオイ！」

女人の声が家の中に響いた。

「アキ……ホ？」

「え？」

私はアオイさんを見た。

「アキホなの？ アキホ！」

立ち上がつてアオイさんは叫んだ。

アキホつて……アオイさんが心残りにしていたア

キホさんの事だらうか？

「いるのね、アオイ！」

「私はここにいるわ！」

アオイさんは襖に近づいた。

「お、おい！ 動いてはいけない！」

夏美さんが制止するのも聞かずに、アオイさんは

襖をすり抜けて行つてしまつた。

「くそ！ よりにもよつて、なぜ今なんだ……！」

そう言うと、夏美さんは襖を開けて玄関の方へと

向かつて行つた。

「え、え？ どうなつてているの？」

軽くパニックになりながら私は呟いた。

えつと、えつと……夏美さんはこの場を動くなつ

て……あれ？ でも、アオイさんは行つてしまつた

から、私がここにいる意味は……それとも、ここに

いた方がいいの？ 夏美さんは行つてしまつたし

……。

脳内をさまざまな思考が飛び交い、呼吸が苦しくなつてきた。

「……つ。もう！」

考える事を放棄した私の心は、夏美さんを追いかけるという選択をしたようだ。

正座で少し痺れた足を軽く叩いて、私は玄関へと

向かう事にした。

部屋を出て。

「アオイさん……」

廊下を走り。

「夏美さん……！」

左に曲がつて、玄関に続く廊下へと……。

「アキホっ！」

アオイさんの叫び声。

「湖君！ そこを動くな！」

アオイさんをかばうようにして、玄関の方を向いている夏美さん。

「ア……オ……イ」

数メートル先の玄関に女性の靈がいた。

彼女は胸を刀で貫かれていた。

「湖ってガキはどこにいる」

アキホさんらしき女性の靈を、刀で刺している

「ゾレ」は不吉さを含んだ禍々しい声でそう言った。

「アキホ！」

泣き叫んでアキホさんに駆け寄ろうとするアオイさんを、私の方へと夏美さんは突き飛ばした。

「あつ」

そして、対峙している「ソレ」に右手を向けると。

「外へ出ろ」

そう一言、夏美さんは唱えた。  
すると。

「ちつ！」

と、悪態をついたソレの姿が突然、玄関から消えた。

「うう……」

その場に崩れるようにして倒れるアキホさん。

「もう逃がさん……！」

夏美さんはそう呟いて、私とアオイさんとアキホさんを見た後に外へと飛び出していった。

「アキホ……！」

よろよろとアキホさんに近寄るアオイさん。

瞬間に目の前で起こった出来事に、私の心臓はドクドクと音を立てて反応していた。

つづく